

研究課題名 子どもが競技スポーツを辞める理由に関する研究

研究代表者 植松 雄太

### 【緒言】

子どもたちは純粋にトップアスリートに憧れながらスポーツ活動を行っている。その中でも早期に強い筋力と調整力のバランスや高度な技の習得が要求される競技が体操系種目であるが(平井 1992)、滝沢(2003)は国際体操連盟規約における競技規則や採点規則も低年齢化による問題を示唆している。また女子体操競技の早期引退理由は、怪我によるものでキャリアがあるアスリートは継続しているとコーチに認識されていたが(Pereira et al., 2014)、2016年にアメリカ体操協会において発覚した性的暴行事件は、アスリートとコーチやスタッフの関係性の崩壊だけでなく、アスリートが主体的活動のできない強豪国の現状であった。

### 【研究目的】

国際コーチングエクセレンス評議会(以下 ICCE)は、コーチが備える知識を対他者への知識、対自己への知識、専門知識として提唱している(ICCE 2013)。本邦では内山(2013)はコーチの本質とは理論知に基礎づけられた「推理過程」と「制作過程」から成るコーチングという知的営為を統御する先導者として、勝利に向かってアスリートを外発的に力づくで強制すると示唆するが、JOC や各競技団体が行なったハラスメントに関する内部調査における結果に矛盾があり不十分を指摘した(井上 2015)。したがってオフィシャルに行われた調査は表面的な調査結果に止まり改善の方策には不十分であり、ユーストップアスリートが辞めた真の理由を明らかにすることが本研究の目的である。

### 【研究方法】

ユース期に体操系種目(女子体操競技・新体操・トランポリン・エアロビク競技)において国際大会出場もしくは全日本 3 位入賞の経験をも有し、尚且つ成人になる前に引退した元トップユースアスリート女性 4 名(平均年齢  $21.75 \pm 2.06$  歳)が被験者である。調査方法は回顧式の半構造化インタビューを行い、IC レコーダーに全て録音した。1)データの中の着目すべき語句、2)それを言いかえるためのデータ外の語句、3)それを説明するための語句、4)そこから浮き上がるテーマ・構成概念、5)ストーリーラインの手順にて分析を行った。

### 【結果】

ストーリーラインから抽出されたポジティブ経験・思考は、未就学児におけるスポーツとの出逢い、献身的な親のサポート、就学児における親やコーチの影響(人間性)、辛い経験を後世に継承したくない強い意志があり、ネガティブ経験・思考はチーム内格差、精神主義による怪我や心理的ストレスがあった。さらに体操競技以外のトランポリン・新体操・エアロビクにおいてコーチよりパワーハラスメントを受けた。

### 【考察】

精神主義的トレーニングの捉え方として、全アスリートとコーチは、漠然と国内トップレベルや世界に向けてオーバーユースに至り、大怪我をするまで精神主義的トレーニングを繰り返してきた。アスリートとコーチの双方が、これに対して美化していたケースとそうでないケースがあったが、ユーストップアスリートたちは怪我を繰り返すことが努力の制限要因になった。またチーム内格差はコーチがアスリートの自律支援をせず、日本社会同様の上下・師弟・先輩後輩の関係を構築した上で、暴力や暴言がコーチとアスリートの間でも黙認されながら脈々と受け継がれた。さらに日本文化と体操系種目のトップダウンという相似から、トップコーチであってもコーチングが技術的な専門知識に偏りやすく、コーチの期待と欲望がアスリートの自律を阻害されることで、アスリートの意思決定がコーチ自身も気づかない間にアスリートから奪われた。そして内発的動機も失われたことで競技からの回避行動が起きたことでアスリートがドロップアウトした。

### 【まとめ】

スポーツは社会同様に時代の変換期に立たされている。それはアスリートが主体的にアサーショナルな YES or NO を言える環境への改善であり、アスリートが意思決定できることである。ユースアスリートたちはコーチの暴言や態度が暴力に匹敵することや一方的な関係性が引退の要因であった。それはルールから要求されたことをコーチが緩衝できず、機械的にアスリートへ要求した採点種目特有の問題である。